

Lizzie Leighにみられる信仰

足 立 万寿子

【I】はじめに

短篇 *Lizzie Leigh* のテーマは、一般に、若い女性の「転落」問題ととらえられている。しかし、リジー・リー (Lizzie Leigh) が身を売って生活の資をかせていることは推察されるものの、彼女がどのような男にどのように騙され、捨てられて、転落に至ったかについては、また、彼女への社会の無理解、残酷さについても詳しく述べられていない。これは、短篇の性格上中心テーマに直接係わらないことを詳述すると、短篇の焦点が甘くなる恐れがあるからであろう。ギヤスケル夫人 (Mrs Gaskell) は、この短篇で十分には描けなかった事柄は彼女の第2の長篇小説 *Ruth* で深く扱っている。

Lizzie Leigh のもうひとつのテーマは、母の子への強い愛情であると考えられている。しかし、この母の子への献身的愛の源泉は単に家族的絆¹ だけにあるとは思えない。母の子への献身的愛は神への絶対的信仰から生まれ、神への信頼こそが母親の強靱な意志力と行動力を生み出しているように思える。従って、私は、この点がこの短篇の最も主要なテーマではないかと思う。この小論文では、この根底的テーマがどのように具現化されているかを明らかにしていきたい。

【II】ギヤスケル夫人の信仰

ギヤスケル夫人の信仰は、聖書、特に、新訳聖書に基づいている。そして、彼女は、キリストの教えが「光と愛」の教えではなく、「闇と恐怖」の教えであるとするのは、間違っていると考える。さらに、彼女は聖書の教えを誠意をもって行動に表すべきであると考え。つまり、信仰が形式主義や偽善に陥り、人が人を苛酷に審く危険性を指摘している。従って、人はひたすら慈

悲と寛容の心を持つべきだと考える。一言でいうと、彼女は、信仰は愛と赦しの実践にあると信じる。² ギヤスケル夫人はこのような信仰の姿を *Lizzie Leigh* の登場人物を通して読者に示そうとしているように私には思える。

【Ⅲ】 3人の女性——アン・リー夫人 (Mrs Anne Leigh)、スーザン・パーマー (Susan Palmer)、リジー・リー

アン・リー夫人

アン・リー夫人は、妻として愛をもって夫に従い、母として子供たちに尽くし、他人の前では気後れするような一般的な主婦である。一方、彼女は神への強い信頼に基づく強靱な意志力と旺盛な行動力も持っている。

彼女は、寛容さを欠く頑固一徹の夫に密かに反抗心を抱く強さを秘めている。夫は最期に「リジーを赦す」³ と言うが、それを聞いて、彼女は困難をものともせず、リジーを捜し出すための行動を開始する。リー夫人のこのような行動力の土台は、神の愛への絶対的信頼にある。彼女の息子ウィル (Will) は、妹リジーはもう死んでいると思う、と言い、たとえ生きていても、家の恥となるよりは死んでほしいとさえ願っている。そのような彼にリー夫人は、
'God will not let her [Lizzie] die till I've seen her once again. for God is very merciful, ...; He is——He is much more pitiful than man,' (p.4)

と言って、神の深い愛への信仰を伝える。リジーによってリー一家に負わされた不幸を「神が私たちに与えたもうた悲しみ」(p.33) と受けとり、リジーの罪を家の恥として消し去ろうとはしないのである。スーザンが育てているナニー (Nanny) がリジーの子であると分かった日の夜、リー夫人は、リー一家がスーザンと、ある者は養母として、ある者は恋人として、ある者は息子の嫁になるかもしれない者として結ばれるようになったことを神の摂理とみて、ウィルに対して、犯した罪の責めを自らの肩に負って生きようとしているリジーとその罪の子ナニーを赦すようにと諭す。ここでリー夫人の神への絶対的信頼が一層強く裏づけられるのである。さらに、夫が生きていた頃は、

Milton's famous line might have been framed and hung up as the rule of their [Mr and Mrs Leigh's] married life, for he [Mr Leigh] was truly the interpreter, who stood between God and her [Mrs Leigh] ; (p.2)

と表現されているように、ミルトンの『失樂園』(Paradise Lost)の中の一節のアダムとイヴ⁴の如く、夫が妻に神のみことばを伝えていた。しかし今では、妻である彼女自身が神のみことばを伝えるようになった。これは、娘の不幸を克服することで、弱い存在であったリー夫人が大きく成長し、一層の確信をもって神を信頼して生きるようになったことを示しているとも考えられる。19世紀ヴィクトリア朝時代には、女性は、娘としては父親に従い、妻としては夫に従うように定められていた⁵ことを考えると、ギヤスケル夫人がリー夫人をこのような強い女性に成長させたことは画期的であると思える。

リー夫人の娘への愛情の深さは、ようやく捜し当てた娘と再会する彼女の行動や心理の描写によって最も感動的に伝えられる。この再会の場面⁶では、初めは、リー夫人の感情は描かれない。彼女の行動だけが平易な文体で綴られていく。まず、彼女は寝室に入るが、娘との再会に心が奪われて、彼女の頭には娘のことだけしかないことが「リー夫人は小さな遺体には全く気を留めなかった」との一文で暗示される。それは、スーザンの動作「スーザンは小さな遺体の前でちょっと立ち止まった」との文と対照され、強調される。次いで、「go」「withdraw」「see」の動作でリー夫人が娘に会いたいと焦る気持がストレートに読者に伝わってくる。そして、「saw Lizzie」の後にダッシュ「—」が来る。これは、リー夫人がリジーの姿を見た瞬間に抱いた言葉では到底表せない複雑な感情を伝えるものであろう。3年余り前、娘は希望に輝いて憧れの都会へ出ていった。リー夫人の脳裏にはその時の娘の潑刺とした姿が焼きついていただろう。ところが、娘と再会した時にリー夫人が見た娘の現実の姿は、覚悟していたにせよ、あまりにも哀れなものであった。嬉しくも悲しい娘への心情がこのダッシュによるポーズによって簡潔に、そして、見事に表現されている。その後、リー夫人の内面の感情が描写されて、子の苦しみが分かるが故に一層子を強く愛する母親の愛情が描かれる。そして、リー夫人は、目を覚まして罪におびえながらも自分を見上げる娘に、悔いる者への神の愛を説く。神の愛を信じる母親は「放蕩息子」のように娘を迎え入れて、更生へと導くのである。

一方、リー夫人が、スーザンを恋して思い悩む息子ウィルを見兼ねて、本物のレースでトリミングしたボンネットを被り、一張羅の緋色のマントを着てスーザンに会いに出掛ける場面では、子供たちの幸せのために必死になっ

ていても身だしなみを忘れないリー夫人の女らしさ、プライドが感じられる。このように、リー夫人を通して、ギヤスケル夫人は作者自身の信仰の一端を示すと共に、柔順で内気な主婦の人物像の中に、信仰に裏打ちされた深い

愛情を持ち、強靱な意志力、行動力に富み、しかも、身だしなみも忘れない愛すべき女性像を描き出した。

スーザン・パーマー

ギヤスケル夫人はスーザン・パーマーを、控えめで、教養があり、また、強い生活力と精神力と確固とした信仰を持ち、それを実践する女性として描いている。

スーザンは工業都市マンチェスター (Manchester) で働く「女工」⁷である。しかし、ギヤスケル夫人は、ウィルにスーザンを「貴婦人」(p.5)のように感じさせたように、彼女を当時の一般の女工には見られない面を持った女性、つまり、教養を備えた女性としている。

スーザンは、自分からは敢えて話そうとはしないし、自分の感情を他人に見せるような言動を本能的に抑えようとする、もの静かで気品のある女性である。一方、破産した父親と自分自身の生活を立てるために女工として働いて、また、ナニーを育てようと決心した後は、昔受けた教育を基に学校を開いて、家族を支えていく。ところで、当時の倫理観からすれば、私生児を預かることは形式的道徳の順守を強いる世間と対決することにもなる。世間の非難を恐れないスーザンの勇敢さは、神への愛を実践で表そうとする真の信仰によるものであると言えよう。このスーザンの「神の愛」⁸を宿した広い愛の実践は、赤子を救貧院へ連れて行こうとする父親パーマー氏の無慈悲な振舞と対照されて、一層輝きを増す。

スーザンが新約聖書にみられるキリストの教えを具現していることは、子供をスーザンの学校へ通わせているある母親が、スーザンの人柄をほめて、

‘...she’s[Susan’s]just one a stranger would stop in the street to ask help from if he needed it.’ (p.33)

と言う賛辞の中にも示されている。スーザンは「良きサマリア人」のようである。

スーザンは、控えめな性格からめったに自分の考えを人に説こうとはしないが、唯一回、リジーが犯した罪の償いのためには苦しむのが当然であると、言い張る狭量なウィル・リーに対して、

‘Goodness is not goodness unless there is mercy and tenderness with it.’ (p.64)

と諭す。つまり、人の行いの完璧さを求めるあまり慈悲の心、寛容の心を忘れてしまつては、キリストの教えに真に従うことにはならないと言う。これ

は、ギヤスケル夫人が信じるキリストの教えの核心であり、夫人はこの教えをスーザンを通して、読者に伝えようとしたのであろう。

このように、ギヤスケル夫人は、キリストの教えのあるべき姿を具現させる人物としてスーザンを創造し、そのために、「天の天使のように優しくて清らかな人」(p.61)、「あの優しい天使」(p.61)といった表現で、彼女に神のメッセージを伝える天使のイメージを与えたのであろう。さらに、夫人は、

Susan is the bright one who brings sunshine to all. (p.65)

と述べて、スーザンはすべての人に「光」をもたらす存在である、と宣言する。これは、夫人のキリスト教観——キリストの教えは「光と愛」の教えである——を象徴しているように思われる。

ところで、スーザンは、聖女のように現実離れた人間味のない女性のように見えるが、そうではない。スーザンから暗に無慈悲さを責められて、憤慨し立ち去ろうとするウィルに対して、スーザンは「これではウィルの愛を失ってしまう」と、恥じらいながらも、慌てて謝り、愛の告白をするさまは実に人間らしい。このようなスーザンに、読者は好感を持つだろう。

リジー・リー

リジーは、当時の道徳観からみて、6人の登場人物の中で世俗的罪を犯した唯一の罪人として、しかも、19世紀ヴィクトリア朝時代の女性としては最も汚らわしい不義の罪を犯した女性として登場する。当時、私生児を産んだ女性は「殆どの場合死の道を選ぶより他になかった」⁹とされているように、このような女性は個々の事情も考慮されず、社会から抹殺される運命にあった。ギヤスケル夫人自身、このような過ちを犯した不幸な女性の救済に関わったこともあった。¹⁰夫人は、この短篇で未婚の母の問題をとりあげることによって、形式主義的信仰に陥っている人々への反省を促そうとしたようにも思える。

当時の頑なな道徳律に縛られて、リジーの罪の恥じらいと激しい後悔の念は、まず、父親に叱られることへの恐怖、次いで、母親を悲しませることを詫びる気持ちに表れる。リジーが妊娠したと分かった時、奉公先の奥さんはリジーの実家に連絡しようとしたが、父親を恐れ、母親を思いやるリジーは、それを断固として断り、自活の道を選ぶ。当時、このような女性に開かれたまともな職業はなかった。彼女は街の女となるより他に道はなかった。彼女は犯した罪の重大さを十分認識して、

'I am not worthy to touch her [Nanny], I am so wicked;' (p.62)

と言う。そして、彼女が罪の償いを十分に果たしたことは、詳細な具体的説明はないが、苦勞の刻み込まれた彼女の表情で表される。彼女の苦しみは、母親の愛を一杯に受けて伸び伸びと育っていた頃の「丸くて桜色ですべすべしていた」(p.63) 頬と今では「苦勞と貧乏のために深い皺が刻み込まれている」(p.63) 頬との鮮やかな対照によって、一層明瞭に描かれる。しかも、それが、罪あるが故に一層子を可愛く思う母親リー夫人の行動と心理の描写を通して描かれているので、リジーの辛さがなおさら読者の心を深く打つ。母親とは反対の意味でリジーのこの苦しみを一層辛くしているのがリー氏とウィルの形式主義的信仰であった。リジーは、一面では、父と兄の犠牲になったとも言えよう。

さらに、リジーは、母親として子ナニーの墜落死という衝撃的苦痛に見舞われることになる。自分の母親を悲嘆の底に沈めたリジーが、今度は、自分が母親としての悲しみに耐えなければならなくなる。この絶望するリジーについての描写¹¹ では、目、手、耳、腕の体の各部の動きを通して、極度の不安、子の生死を自分の力で確かめようという執念、死を確認した時の絶望が映画の大写しのように異様なまでにリアルに描かれる。ナニーの墜落死がスーザンの不注意によると早合点したリジーがスーザンをなじるときの形相は、「激しく、狂ったような、荒々しい形相」(p.62) と表され、それに応えるスーザンは、「澄んだ、美しい、天使の目」(p.62) と表される。このふたりの女性を対照的に対峙させることによって緊張感が一層高まる。その後、リジーは、次第に平静になる。彼女は、2年余りの間、唯一の生きがいであったにもかかわらず、母と名乗り出ることができなかつたわが子の遺体を胸に抱きながら苦勞の刻み込まれた顔に微笑みを浮かべる。この表情は、さきに、スーザンを激しく責めた時の鬼のような姿と対照されて、読者に美しい印象を与える。J. G. シャープス (Sharps) 氏は「ナニーの死を確認するリジーの行動の描写はメロドラマティックで、三流小説家の技法に墮している」¹² と述べている。確かに、リジーのこの行動は異様にみえる。しかし、この異常さは後に彼女がナニーの遺体を抱く時の安らかな表情と対照されて、罪が清められたリジーの姿を際立たせるためにあるように思える。リジーの罪はナニーの死という犠牲によって贖われたとも言えるからである。

この後、彼女は母親と再会し、神の愛を信じる母の愛に支えられ、悔悟した者として人生を再出発する。しかし、彼女の罪の償いは生涯続く。彼女は、その後の人生をすべて他人に捧げ、自分自身の幸福を追うことはなかつた。他人からの赦しは得られても自分が罪を犯したという現実の傷跡は消えない。

彼女が生涯負い続ける十字架は、「彼女の微笑みは他の人の涙よりも悲しい」(p.65)との痛ましい表現に象徴されているように思える。さらに、彼女に聖女マグダレナのイメージを重ねる読者も少なくないことだろう。

【Ⅳ】 3人の男性——ジェイムズ (James) ・リー氏、ウィル・リー、パーマー氏

このように考えると、この3人の女性はキリストの教えの証しと言える。しかし、ギヤスケル夫人は、3人の男性はキリストの教えに反しているとする。

ジェイムズ・リー氏

ジェイムズ・リー氏は厳格で真正直な男であった、彼の信仰は、厳しすぎるほど堅固なものであり、寛容さを欠いていた。罪を犯したものは、即、罰せられるべきであると考えた。従って、人間の分際でありながら、罪の娘を審いてしまう。この点で彼は形式主義者であったと言える。この形式主義を指摘したのがリー夫人の無言の抵抗であった。ただ、彼は死ぬ間際に自分の過ちに気づき、神と娘に赦しを乞うて死んでいく。このリー氏の心境の変化に関して、詳細で直接の説明はなされていない。しかし、暗示的説明として、短篇の冒頭で、彼がクリスマスの日の朝、鐘の音の響く中で息を引き取っていくという状況が設定されている。

ウィル・リー

ウィルは父親と同じように、厳格で、真正直な余り、小心で寛容さを欠く青年であった。彼は妹を罰せられるべき罪人と断じる。この点で、彼は父親と同じく形式主義に陥っている。さらに、愛するスーザンは、リジーのふしだらさを聞き知ったら自分から離れていくのではないかと恐れて、彼は、リジーを捜して夜更けの街を歩き回る母親の行動を苦々しく思ったり、リジーが死んでくれたほうがまだとすら思っている。つまり、自分の幸せのみを考える利己主義者となり果てている。ところが、彼は、自分では神に対し嘘偽りのない正しい人間であると思っているので、偽善に陥っていることになる。彼は残酷にも「リジーはどんなに苦しんでも当然だった」(p.64)とさえ言う。しかし、いつもは言葉少ないスーザンの「慈悲と寛容」を説く率直な発言に、彼は心の葛藤を表明し、スーザンへの愛を告白する。彼は、スーザンの広い愛の心で頑なさや狭量さを溶かされて、真のキリストの愛に目覚める。つまり、形式主義者、偽善者から解放され、真のキリスト者への道を踏

み出すことになる。彼とスーザンの結婚がこれを暗示している。

パーマー氏

パーマー氏は、娘のスーザンが見ず知らずの女の赤子を預かったことに対し、娘をなじり、赤子を救貧院に引き渡すと言い出すような無慈悲な男である。彼は、深夜泥酔して帰宅し、それが遠因となって幼児ナニーの転落死を引き起こす。それにもかかわらず、ナニーの死の責任はスーザンにあるとして、まず、彼女を責め、次いで、悲嘆にくれる彼女を見て狼狽し、今度は彼女を慰めるために、ナニーが死んで厄介払いが出来たかのように言い、かえって、痛むスーザンの心の傷に塩を擦り込むようなことをすることで、人間への真実の愛の心を持っていないことが示される。ギヤスケル夫人は、この無慈悲な男パーマー氏を登場させて、世の中には、キリストの愛を生きている間に感じたり、理解したり、また、実践する機会に恵まれない人間もいるということを表そうとしたのであろう。また、実社会では、ナニーの養育などの厄介なことには係わり合いたくないというのが世間一般の普通の反応であろうから、パーマー氏のような人間を登場させることは現実をより正しく描くことになろう。

パーマー氏は無慈悲な男ではあるが、外見上慈悲深い人間であるかのように振舞っていないので、偽善者であるとの汚名は免れている。ところで、ギヤスケル夫人は、この短篇の最後の段落で登場人物それぞれのその後の人生について簡単に述べているが、パーマー氏に関しては、一言も言及していない。また、リー家とパーマー家の人々の中で彼の洗礼名だけを明らかにしていない。夫人のパーマー氏へのこのような扱いは、悪人の存在という現実と人間の善性を信頼したいという彼女の人間観¹³の間のジレンマの表れのように思える。それは、夫人がある手紙¹⁴の中で、「自分は偽善者ではないかと感じることがよくある。それは、私は作品に善しか書かないからで、作品と現実の世界が余りにも違うので恥ずかしいくらいだ」と言っていることから分かるであろう。

【V】短篇小説のトーン、ストーリー展開における偶然性、道徳性

悲しい事件が連続するこの短篇全体のトーンは暗い。しかし、ギヤスケル夫人の神に対する絶対的信頼から、この暗さは人間存在を全面的に否定するものであってはならない。明るさを出すのに、こまやかな愛情を感じさせる描写、例えば、ふたりの息子ウィルとトム (Tom) がお茶道具をテーブルに

並べ、お湯を沸かして、夫を亡くして悲しみにくれている母親を慰めようと
気遣う場面、スーザンが深夜酔って帰宅するであろう父親のためにいつも蠟
燭用のマッチをダンスの上に用意していたといったような描写が織り込まれ
ている。

さらに、夫人は色彩効果を計っているように思われる。白い雪の中を進む
リー氏の葬列の黒、一家が引っ越した工業都市マンチェスターの煤けた黒、
リー夫人がリジーを捜して街をさまよう夜の黒——この白黒だけの世界の中
で、最後に、スーザンとウィルの子のナニーが日当たりのよい丘で摘む雛菊
が、希望の光とも思えるようにほんのりと光る。夫人はキリストの教えは「光
と愛」の教えであると言う。春の花の「光」は夫人の揺るぎない信仰、神へ
の確固とした信頼を象徴しているように思える。

この短篇の欠点として、筋の非現実性が指摘されよう。リー夫人がリジー
を見つけるのに、何回となく偶然が作用している。しかし、これはさほど気
にならない。事実を少しずつ明らかにしながら、サスペンスを保ち、読者を
惹きつけていくからであろう。また、ナニーの突然の転落死に関しても、た
だ現象面のみをとりあげれば、唐突すぎるように見えるが、酒飲みパーマー
氏の深夜の帰宅、出迎えるスーザンの動きに眠りの浅いナニーが目覚め、真っ
暗な中を寝ぼけ眼で歩き出して、階段を踏み外し、落ちた床が石であったと
いうギヤスケル夫人の用意周到な叙述により、読者には十分納得がいく出来
事ととらえられる。さらに、ナニーがリジーの子だと推定できる証拠のペビ
ー服の柄がスリリングな展開を助け、しかも、この洋服が3世代の母、娘、孫
娘を結びつけることになったのである。このようなこまやかな愛情を示す洋
服のエピソードはこの短篇の中心プロット——神への絶対的信頼に基づく母
の愛娘捜し——にふさわしい。

しかし何よりも、揺るぎない信仰を持つギヤスケル夫人にとって偶然とい
うことはありえなかったのではないかと思われる。従って、偶然のようにみ
える出来事でも実は神のみ手による出来事であるということを示そうとこの
ような手法が使われたように思える。

ギヤスケル夫人の小説に道徳的説教調を感じるとその欠点を指摘する人が
いる。¹⁵ しかし、人生をいかに生きるべきかという問題が人間の関心事であれ
ば、人生と道徳は表裏一体となる。小説家が自分の考えを小説の形で表明す
る時に、自分の生き方が小説に滲み出るのは当然である。小説家は、小説と

いう形で、人間の生き方を社会に問いかけ、共感であれ、反発であれ、理解であれ、読者からの反応を期待する。従って、小説において道徳性が問題となるのは、その問いかけと期待の質によると思う。作者の問いかけが独りよがりなものであるにもかかわらず、作者が読者に同意を強要するような小説を書くならば、その小説は独善的教訓小説に墮するであろう。しかし、作者の問いかけが普遍的なものであり、その問いかけの姿勢が真摯なものであり、そして、問いかけを具現するための様々な小説技法が優れているならば、読者は少なくとも作者の主張に耳を傾けるであろう。

ギヤスケル夫人の人生の指針は、キリストの教えである。人間の使命について、彼女は親友への手紙¹⁶の中で「人は誰もその人にしか出来ないような仕事を与えられている。それを探し出して、果たすべきである」と述べている。また、彼女は、同じ友人に宛てた手紙¹⁷の中で、自己分析を行っている。つまり、真のキリスト者としての自分、妻であり母である家族のための自分、社交のための自分、自分のための自分と自己を4つに分けている。彼女は神から与えられた使命を、「第一の自分」が小説を書くことと見極め、「第二の自分」は妻として母として主婦の仕事を果たし、「第三の自分」は友人知人との交際を楽しみ、そして、「第四の自分」は自分の楽しみのための時間を持ったのであろう。彼女が「第一の自分」の使命感から小説を書いたとすれば、彼女の小説がキリスト教的倫理観に基づく教訓的要素を含むようになるのは避けられなかった。また、神に対する深い信仰を持っていた彼女の作品がキリストへの信仰の雰囲気にも包まれるのも当然であった。しかし、この教訓が小説の中で押しつけがましくなく、十分に納得のいくものであれば、教訓の有無が小説の価値を左右することにはならないであろう。

ギヤスケル夫人はこの短篇で真の信仰の姿を3人の女性を通して示そうとした。そして、その反面教師として3人の男性を登場させた。しかし、作者の倫理観だけが小説から浮き上がってはいない。これらの人物は、作者の概念だけを具現した人形ではなく、血の通う人間となっている。リー氏は一家の長として家族に絶大な権力を握っていた男性としての姿が彷彿とする。リー夫人は頼もしい母親であり、愛すべき女性である。スーザンは清らかでありながら、頼りがいもあり、また、可憐さも備えている。リジーは償いを自分の幸福として生きていくが、読者は温かく見守ってやりたい気になるだろう。ウィルはリジーには厳しいが、恋人には頭が上がりない滑稽とも言える青年である。パーマー氏は口では横柄なことを言っているが、娘に頼り切っている自分の情けない現状が分かっていない飲んだくれて、読者は彼には悲哀を

覚えるであろう。たとえ、この短篇に説教臭さがあるにしても、これらのリアルで印象深い登場人物がその臭いを消す優れた芳香剤となっているように思える。

【VI】 結び

この短篇を読んだ人は、見事な小説手法によって具現されたテーマ——真の信仰——の真摯さに心打たれ、また、作者の信じるキリストの教えを共に理解し、強くて女らしい母リー夫人、清らかで芯の強いスーザン、罪をあがなって聖女のようになったリジーをいつまでも忘れることはないであろう。

【註】

1. John Geoffrey Sharps, *Mrs. Gaskell's Observation and Invention: A Study of Her Non-Biographic Works* (Fontwell: Linden Press, 1970), p.94.
2. Enid L. Duthie, *The Themes of Elizabeth Gaskell* (London: Macmillan Press, 1980), pp. 152-54, p.156, pp.159-60.
3. "Lizzie Leigh," *Household Words*, 19 vols with 1 extra vol. (rpt. 東京: 本の友社, 1989), I [以下H. W.と略す], 2. 以後同短篇からの引用直後の () 内は同書の頁数を示す。
4. Elizabeth Gaskell, *Cousin Phillis and Other Tales* (Oxford: Oxford University Press [World's Classics], 1981), p.357. Milton's famous line: 'God is thy law, thou mine: to know no more/Is woman's happiest knowledge and her praise' (Eve to Adam, *Paradise Lost*, Book IV, ll. 637-8).
5. Janet Dunbar, *The Early Victorian Woman: Some Aspects of Her Life (1837-57)*, (London: George G. Harrap, 1953), p. 17, p. 30.
6. H. W., p. 63.
7. A. W. Ward, ed., *The Works of Mrs. Gaskell*, 8 vols (Hildesheim · New York: Georg Olms Verlag, [The Knutsford Edition], 1974), II, xxvi.
8. 山脇百合子『エリザベス・ギヤスケル研究』(東京, 北星堂, 1976年), p. 77.
9. *Ibid.*, p. 97.
10. J. A. V. Chapple and Arthur Pollard, ed., *The Letters of Mrs Gaskell*, (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1967), [以下G. L.と略], pp. 98-100.
11. H. W., p. 62.
12. Sharps, *op. cit.*, p. 94.
13. 足立万寿子『明の星女子短期大学紀要』 No. 10, (1992), 33-34.
14. G. L., p. 228.
15. A. B. Hopkins, *Elizabeth Gaskell: Her Life and Work* (London: John

- Lehmann, 1952), p. 89.
16. G. L., p. 107.
17. G. L., p. 108.

【参考文献】

[註で挙げたものは除く]

- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre* (Harmondsworth: Penguin Books, [Penguin English Library], 1966).
French, Yvonne. *Mrs. Gaskell* (London: Home & Van Thal, 1949).
Ganz, Margaret. *Elizabeth Gaskell: The Artist in Conflict* (New York: Twayne, 1969).
Gérin, Winifred. *Elizabeth Gaskell: A Biography* (Oxford: Clarendon Press, 1976).
Graham Storey, Kathleen Tillotson and Nina Burgis, ed., *The Letters of Charles Dickens* [general editors: Madeline House, Graham Storey and Kathleen Tillotson] (Oxford: Clarendon Press, 1988), VI (1850-1852).
Lansbury, Coral. *Elizabeth Gaskell: The Novel of Social Crisis* (London: Paul Elek, 1975).
Pollard, Arthur. *Mrs Gaskell: Novelist and Biographer* (Manchester: Manchester University Press, 1965).
Sanders, Gerald Dewitt. *Elizabeth Gaskell* (New York: Russell & Russell, 1971).

- 浜林正夫『イギリス宗教史』(東京, 大月書店, 1987年).
カザミアン, ルイ著, 石田憲次・白田昭共訳 『イギリスの社会小説 (1830-1850)』(東京, 研究社, 1958年).
小池滋『英国流立身出世と教育』(東京, 岩波 [岩波新書], 1992年).
三ツ星堅三・内田能嗣・上山泰・山田勝・横山徳爾『イギリス小説とモラリティ』(大阪, 創元社, 1979年).
巽豊彦『産業都市と産業小説——ギヤスケル夫人とマンチェスター』, 刈田元司編 『都市と英米文学』(東京, 研究社, 1974年).